

(株)多田農園



代表取締役
多田耕太郎さん

全国、世界に広げたい サクランボの高い潜在力

「食」は人々の「いのち」を支える営みであり、食料を生産する農業は「いのち」を守る大切な産業です。人口減、後継者不足といった時代背景の中、日本の農業の中心だった家族経営型から、新たな経営形態を取り入れ、仕事の進め方や販売戦略を一新して「地域農業の

持続的発展」を目指している人々・団体が活躍しています。JAバンクをはじめとするJAグループは、農業の新たな展開を志す人や団体に對し、さまざまな形で支援を行っています。JAグループと手を携え、山形県の農業に新風を吹き込んでいる法人を紹介します。

高品質のサクランボを「ド」から出資を受けました。

業容拡大に 頼れる存在

生産することともに、特殊な方法で8月まで品質を保つ「紅姫」など積極的な商品展開を進めているのが、山辺町の「多田農園」です。この春、サクランボ園を拡大するとともに、事務所や作業スペースを増築。その際の資金として、JAバンクの「アグリシードファン

」資金調達など、農業経営には一般企業と異なる「特殊性」があります。JAはその特殊性をきちんと理解し、いろいろなことを一緒に考えてくれます。

JAバンクは経営上、とても頼りになる存在です。代表取締役の多田耕太郎さんが力説します。

1996年にサクランボ栽培を始め、徐々に規模を拡大してきました。販路開拓は主に自前でを行い、「日本ギフト大賞」を受賞するなど全国にファンを



良質のサクランボを作るために欠かせない摘果作業

売可能な期間を3カ月程度まで延ばして「こうと」考えています。

複数品種導入 独自の冷蔵法も

サクランボは一般的に、収穫・出荷の時期が1カ月程度の短期間に集中します。多田農園では複数の品種を導入しているほか、特殊な方法で冷蔵した物は8月まで出荷が可能。さらに温室栽培も取り入れ、販

出も視野に入りたい。10年程度で結果を出せるようにしたい」と意欲を見せます。

こうした積極性に引かれ、県外から「働きたい」と訪れる人も増えています。培ったノウハウとブランド力を次代に継承しながら、多田農園の挑戦は続きます。

助成制度の活用でも、JAが大きな役割を果たしました。「情報の早さ、手続きのスムーズさはJAならでは。専門性の高い担当者」と、農業の将来性を語り合ったりしたものです」と振り返ります。